

メコンデルタ伝統的集落の 特質と現在

ーティエンザン省カイバーの調査1ー

概要 文化庁文化財部とベトナム文化情報省（現文化スポーツ観光省）との間で、伝統的集落および建造物の保存、修復、管理の分野における技術協力に関する協力協定が2003年に結ばれた。当研究所では、文化庁の要請を受け、ベトナム北部ハタイ省ドゥオンラム村、中部トゥアティエン・フエ省フォックティック村、南部ドンナイ省フーホイ村の集落調査に参加してきた。2011年は、南部ティエンザン省カイバーの調査を、8月、12月の2回に渡っておこなった。

カイバーは、メコン川（前江）の河口から90kmに形成された水上マーケットを中心とする小都市である（図31）。水上マーケットは、メコン川北岸に注ぐカイバー川の河口に展開し、その周囲約1kmの範囲の陸部に市街地が広がる。川岸にはコンクリート造の水上家屋が建ち並び、舟上生活者の姿がみられるなど、メコンデルタ特有の居住景観が形成されている。近年、カイバー大橋やホーチミン市へと続く道路が整備され、水上から陸上への輸送の中継地へと変化しつつある。調査の対象としたのは、カイバー市街西北部のカイバー1B区と、この区に隣接するドンホアヒェップ村のフーホア区、アンビンドン区、アンロイ区の計4区で、市街地と周囲に展開す

る果樹園地帯とをまたがる場所にあたる。

集落の立地と構成 調査地は、メコン川が上流から運んできた土砂が弧状堆積した新デルタ上にある。平均標高が2m程度しかないデルタは、雨季の雨水と川の氾濫による浸水のため、本来は農耕や居住に不向きである。メコンデルタでは、19世紀初頭の阮朝から仏領時代にかけて、舟運や排水目的の運河が多数掘削され、飛躍的に耕地化が進んだ。自然の微高地である新デルタは、そのうちでも最初期に開拓の手がおよんだ地である¹⁾。

調査地では、カイバー川右岸に注ぐバーホップ運河が幹線水路となり、これに小運河が間隔をおいて取りつく（図32）。宅地は、運河または背割り道路に沿って短冊状に細分される。住居は運河や道路に面して建てられ、後背地は果樹園などの畑地として利用される。宅地の境にも水路が引かれる場合が多く、農地への給排水などに利用されている。かつては小舟を使って、農地からマーケットまで水路や運河伝いに作物を運ぶことができたが、2000年のメコン川氾濫の後に、堤防（河岸道路）や堰が造られ、小運河とバーホップ運河間の通行が不可能となった。それを機に舟運から陸運（バイク）へとシフトしつつあるが、大量の作物の運搬には現在も船を利用し、バーホップ運河の河岸には多くの棧橋が架かるなど、運河を中心に形成された集落の様が残っている（図33）。

生業 住民の多くは、果樹栽培を主な生業とする。住居周辺や裏手の農地に細かく掘割を施し、幅広の畝を立てることで、雨季には余分な土壌の水分を排出し、乾季には潮汐を利用して灌水を得る（図34）。作物はリュウガン、ザボン、レモン、パラミツ、ドリアン、バナナなど多種に及ぶ。果樹栽培が普及したのは30年ほど前からで、それ以前は稲作が主であった。土地の制約から稲作に機械を導入することができず、収益効率のよい果樹に転換したのだという。現在みられる農家には、大きく2つのタイプがある。1つは、稲作が生業であった時代まで遡ることができる大・中規模農家で、現在は商品価値の高いリュウガンなどを単植で栽培する。もう1つは当初より果樹栽培を生業とする小規模農家で、多種多様な果樹を混植し、養魚や家畜飼育もおこなう複合農法を採る。前者はこの地域に比較的古くから居住し、開拓時代の伝統的な生活様式を継承する家、後者は居住の歴史が浅く、自給自足的な農業を営む家である場合が多い。

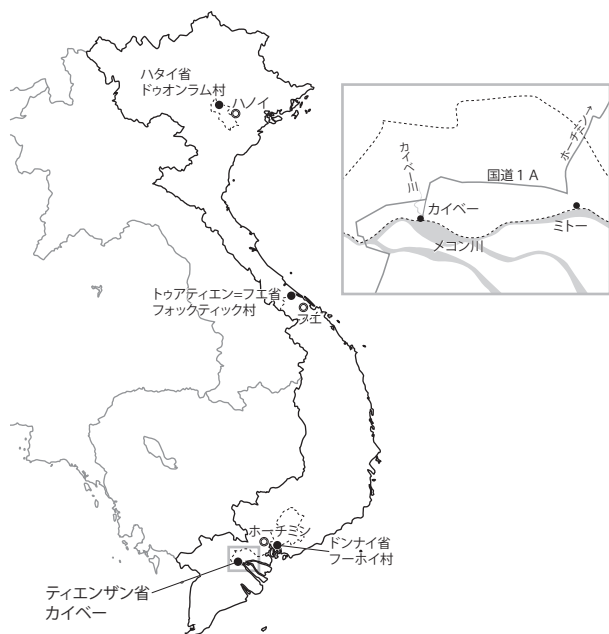


図31 調査地位置図

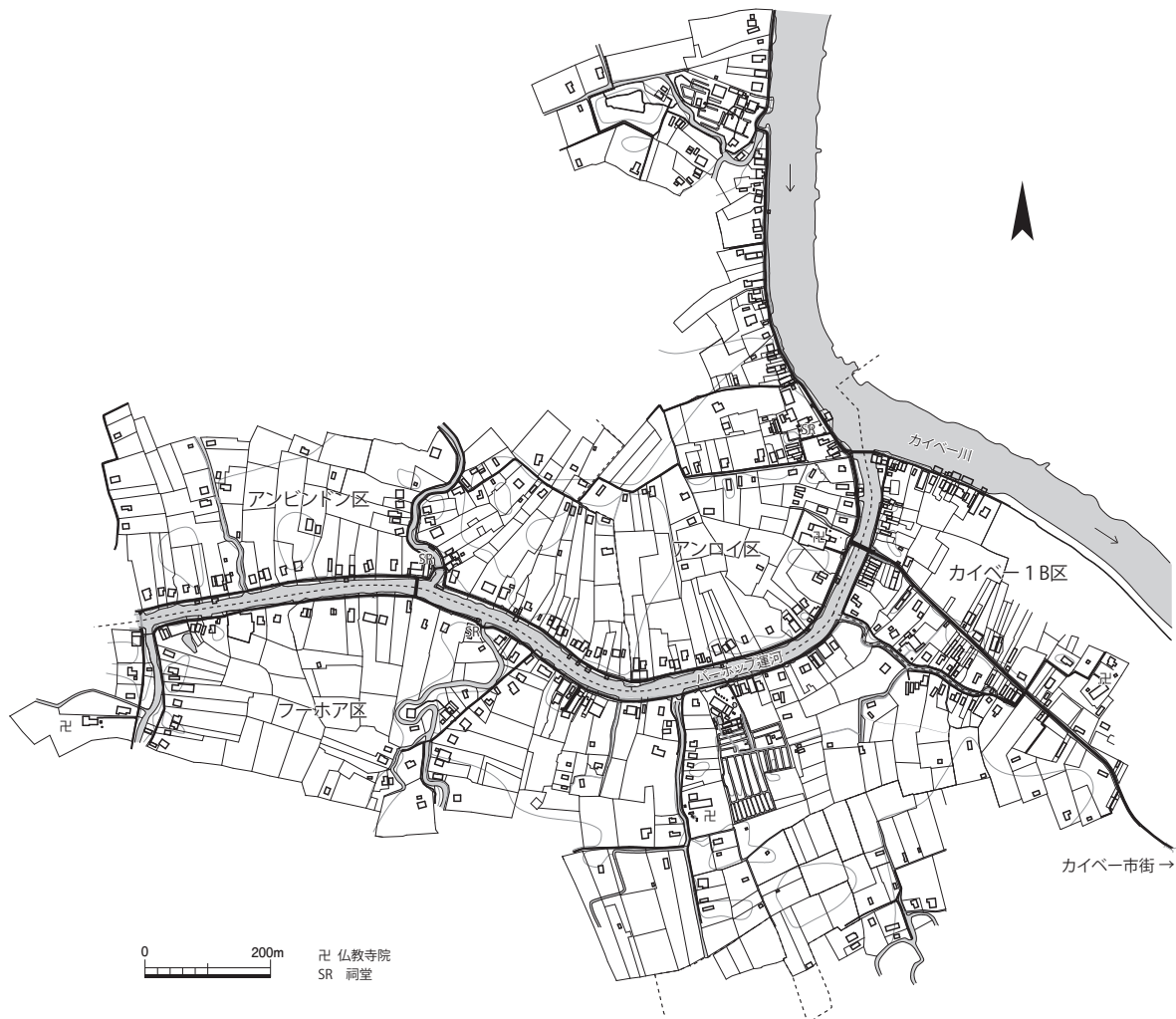


図32 調査地の運河と宅地割 1 : 12000

集落の変遷と特質 以上の農家のパターンを踏まえて、現況の敷地の区画をみると、短冊状の敷地がより大きな単位をもってまとまることが読み取れ、かつては少数の大地主が広大な農地を経営していたと推察される。それが分家や小作人の定着などで土地が細分化していき、現在の姿となったと考えられる。舟を持たない小規模農家や広い農地を持たない人々も生業を成り立たせることが可能な市街地近郊という立地条件も、土地細分化の要因の1つとしてあげられよう。

カイベールの集落構造は、メコンデルタ開拓以来の運河や水路を基盤とする。伝統的に流通の中継を担う商業都市でありながら、農地と水運を活かした生業が継続され、これまで大規模な地割の改変なく集落構造が維持されてきた。同じ南部の集落であるフーホイ村との比較を通じて、デルタに営まれた集落の特質についてさらに分析を進めていきたい。

(高橋知奈津)

註

- 1) 石井米雄監修『ベトナムの事典』角川書店、1999。



図33 バーホップ運河と舟着場



図34 リュウガン園の畝と水路